今輔・おばあさん衆　古今亭今輔

古今亭今輔

今輔・おばあさん衆

東峰出版刊

昭和三十八年十一月十五日　印刷
昭和三十八年十一月二十日　発行

© 今輔・おばあさん衆

定価　四五〇円

著者　古今亭今輔
発行者　宇都宮　登
製作　三ッ木幹人
印刷　秋山喜代司

発行所　東京都千代田区九段四ノ一一
東峰出版株式会社
電話東京（三三二）三一三六番
振替東京七四九一三番

落丁・乱丁は本社にてお取替えいたします

今輔さんと私

玉川一郎

私の祖母は弘化四年の生まれであったから、今生きていれば、百十七才である。八十五まで生きていたが、その還暦の年に私が生まれたので、特に可愛がられたらしい。しかし、自分は松代藩の家老の娘で松本藩の玉川家に嫁入って来たのに、私の母が、福井の漁師の娘であったのが気に入らなかったらしく、孫の私が見てもいい姑とは思えなかった。そうした「女の終点」である「お婆さん」の、愛すべく、そして憎たらしい姿を描いてあますところのないのが、「今輔さんのお婆さん」であろう。

憎たらしい「お婆さん」の、どこが愛すべきところかと言えば、人生の哀愁の極致が「お婆さん」だからである。

世の中の「お爺さん」の大部分がしたような道楽をした「お婆さん」がいたら大変だ。「お爺さん」だけをまもった「お婆さん」の宿命として、そうした「お爺さん」より長生きなのである。

そうして、特に可愛がった「孫」にまで、「いい姑とは思えなかった」と言われるのである。その中で、今輔さんの「お婆さん」は、いつも今輔さんにあたたかく演出されて居るんだから、以って瞑すべきであろう。さて、その今輔さんとは二十年近い知己だが、相当なイコヂな人だと私はひそかに思っていた。

ところが、数年前、私の知人が区会議員に立候補した時、私が選挙事務長をおしつけられたので、今輔さんに応援演説をたのみながら、私はその演説会の夜、旅行に出たので、家内にあとで、どうだったと訊いたら、

「師匠が、私は候補者のかたを存じ上げませんが推薦者の玉川先生はとてもイコヂなかたです。そのイコヂな先生がいいと言われるなら必ずいいかたです……云々」

と言う演説に、満場大笑いとなったという。

おかげでその候補者は当選した。私はイコヂはお互いに認識しあうものだということをその時知ったのである。

そのイコヂな今輔さんが、これだけうちこんだ「お婆さん」が悪かろうはずがないのですすんで提灯を持つ次第である。

昭和三十八年　盛夏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

今輔さんと私 …… 玉川一郎・一
実話　お婆さん衆 …… 古今亭今輔・九
銘仙売場の客・師匠の奥さん・おせいさん・
モダンお婆さん・おとみさん・大往生のお婆さん
服装・猫婆・電車賃乞食・有料老人ホーム・
孫に愛されるお婆さん・長谷川先生とお婆さん
お説教婆さん …… 二七
取次ぎ婆さん …… 三七
くず湯 …… 五〇
お婆さん三代姿 …… 五八
アリババ …… 六七
想い出 …… 七七

老稚園……八八
三十三年目の喧嘩……九七
へそくり料理……一〇八
峠の茶屋……一一七
留守居番……一二七
お婆さん江戸を行く……一四〇
猫ババ……一五〇
小言婆さん……一六一
パーマネント……一六八
結婚行進曲……一八二
温泉……一九二

お婆さん座談会 …… 二〇三
女社長 …… 二〇〇
老婆の呪い …… 二三四
作者のことば …… 二四一
有崎勉（柳家金語楼）　鈴木みちを
林家正楽　丸目狂之介　永滝五郎
あとがき …… 古今亭今輔・二五九

今輔・おばあさん衆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

実話　お婆さん衆

古今亭今輔

一　銘仙売場の客

私が、上野の松坂屋へ奉公したのは、（たった二十日間）大正二年九月の末でした。

私の生まれが、群馬県佐波郡境町の、伊勢崎銘仙の縞物専門の織屋であったため、銘仙売場へ見習いとしてまわされました。銘仙については、子供ながらすこしばかりの知識のあったことがよくなかったようです。

六十前後の銘仙の着物を着た、胡麻塩の髪を束髪に小じんまり結った婦人が、しきりに物色しておりましたが、いい柄の銘仙を見つけて、私のところへ来て、「これは、純絹ですか」と、聞きますから、私が「イヤ紡績が入ってます」。また、しばらくたってから「これは、どうです」「これにも綿紡が入ってます」。二時間ほどの間に、五六回同じことを繰返しました。当時十五才の私は「奥さ

ま、ここをご覧ください。このミミに純絹織と楕円形の判の捺してあるのが絹糸ばかり、絹綿交織という判が、紡績が入っているのです」と教えましたら、それからまた一時間ほど、銘仙の柄と値段と判を見てまわっておりましたが、ついに買わずに帰ってしまいました。

当時、絹綿交織は六円から八円。純絹織は十二円から十六七円。倍以上ちがいましたが、老婦人は七八円で純絹織を買おうというのですから無理です。閉店まぎわに、私は売場主任から叱られました。

「銘仙は全部、絹糸だとお客さまは思いこんでいらっしゃる。六七円で絹糸ばかりの品物がある筈はない、子供のくせに余計なことをいわずに〝エエそうです、全部絹です〟といえばいい」。

常識からはそうでしょうが、私は腑におちませんでした。〝こんな大きな店で嘘をつけと教える!!〟その頃、小学校二年の修身の教科書に『正直』というのがありました。お客さまが反物を買おうとすると、小僧が〝ここにキズがあります〟と教えたら主人に叱られ〝黙って売ってしまえ〟と教えた主人の店はつぶれ、小僧は立派な商人になりました。「正直の頭に神やどる」と先生に教えられたのを

思い出し、松坂屋を二十日間で退店してしまいました。その松坂屋さんが、ますます発展して、私がウソ専門、根なし草の落語家になってしまいました。

二　師匠の奥さん

三代目小さん師匠の奥さんは、（おかみさんといっておりました）お化粧なんかしたのを見たことがありません。お客さまが来て玄関へ現れますと、はじめての人はかならず、女中さんと間違えました。なりふりにかまわず、お孫さんを可愛がっておりました。

弟子が何時に行こうと、挨拶をすると「アッご飯はすみましたか、台所へ行ってご飯を食べなさい」。自分の弟子ばかりでなく、どこのお弟子さんがきても、「ご飯はすみましたか？」。アア、いい師匠を持った、有難いおかみさんだ。その師匠の食事が、台所で食べさせて頂く、われわれ弟子のおかずと同じでした。有難いことです。

三　おせいさん

三代目の小さん師匠の弟子になりましたのは、落語家になって六年目、小山三と名乗りました。

師匠専属のお囃子に、（三味線を楽屋でひく、下座）平田せいという、お婆さんがおりました。品のいい、若い頃は、さぞ美人だったろうと思われる人でした。最も父親は、先々代、富士松紫朝。明治初年、円朝師匠と看板を竝べて寄席へ出演しておりました、新内の名人。先代紫朝は、柳家紫朝と亭号をかえて襲名しました。この師匠は三代目小さん師匠の前へ出ておりましたが、芸がそこまでいかないから、富士松は名乗れないと卑下して、柳家紫朝。この名人先々代、富士松紫朝は、九州小倉から上京した人で、墓は小倉にあるそうですが、この紫朝師匠の娘で、晩年下座さんになりました。

私が、先代小円朝師匠の東海道巡業の折、前に使ってもらって、むろん前座の次にあがる二ツ目。そのときのお囃子が、おせいさん。静岡市七軒町の入道館という寄席へ出ておりましたが、二長町（赤線）へ遊びに行って悪い病にかかり、

医者に診てもらいましたら、すぐ手術をしろと言われ、東京へ帰るにも、給金は使ってしまって金はなし、どうしようと途方にくれておりましたら、「これを持って東京へ帰り、神田五軒町の鈴木病院（院長は、有名な蔵前の柳枝といって、柳派の頭取をしていた師匠の息子）へ入院しなさい」といって、三十五円（お米が十五キロ、四円五十銭の時代。お米に換算すると四斗俵、二俵分）出してくれました。

「おばァさん、こんな大金借りても、返せない（その頃、月給五十円でした）病気が治っても、この金を返すと、食わずにいなくっちゃァならないから」

「返さなくってもいいヨ。若いんだから身体を大切におし、そのかわり私が死んだら墓まいりをしておくれ。病院へ入ってお金が無くなったら、またあげるから安心して入院おし」。

そのときは眼頭が熱くなって、汽車に乗ってから泣けて泣けて堪りませんでした。

昭和二年五月二十一日に歿しました。約束通りお彼岸の墓参は欠かしません。谷中の日蓮宗の寺で妙福寺。

今年三十七回忌です。

四　モダンお婆さん

これは仲間うちのおばァさんですが孫がボーリングをやりに行きたいといえば

「アアいいネ。お母さん、私も行くヨ。孫一人は出せませんヨ」

野球から、ダンスホール、映画、観劇、また孫も気が合って、喜んで一緒に行きます。近頃では和服を着ないで、もっぱら洋装。孫が富士登山をするといったら、私も行く。さすがに息子が怒って

「駄目です。おばァちゃん、ほかのことはいいですけど、モウ九月、いけません。絶対にいけません。肇はお友達と行くんですから」

おばァさんも、仲には逆らえません。だまってしまいましたが、孫が富士へ出かけた日に、おばァさんの姿が見えないので、家中心配してますと、警察から電話がかかりました。〝御殿場の警察まで、保護しているから迎えにくるように〟老婆が一人で、富士登山するのを、駐在所の巡査が引き留めて署まで連れて来たんだそうです。警察でも驚いたでしょう。当年八十二才。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.